

第3回ブルガリア学国際会議に出席して

二宮由美

2013年5月23日から26日まで、聖クリメント・オフリドスキ名称ソフィア大学（Софийски университет „Св. Климент Охридски“）において、第3回目となるブルガリア学国際会議（Трети международен конгрес по българистика）が開催された。約500名の参加・発表者で、その半数以上がヨーロッパ、アジア、アメリカからとのこと。ソフィア大学の創立125周年を記念して、今回は1981年と1986年に続く、実に27年ぶりのブルガリア学の会議開催となった。筆者は1985年から93年まで留学の機会を得たが、その際、創立100周年の奨学金を頂いていたことを思い起こしていた。以前、来日したブルガリアのジャーナリストの方に、そのことをお伝えすると「君たちはただ奨学金を受け取った、と思っているかもしれない、でもそれは例えば僕の母のように、朝から晩までミシンに向かい、工場で裁縫仕事をするそういう人たちのおかげなのだよ」という返事、その言葉が忘れられない。

開会式は5月24日に開催された。この日は「キリルとメトディの日」でスラヴ文字を祝う日である。5・24記念祝賀がソフィア大学に隣接するキリルとメトディ名称国立図書館前の広場で開催されていた。全国から教育関係者と生徒が集い、パレードがにぎやかに行われ、人々はそれぞれ花をもっていた。その後、大学内でロセン・プレヴネリエフ大統領を迎え開会式が行われた。折しも、5月12日にブルガリアの選挙が行われ、29日に内閣の承認と組閣が行われるという時期で、現地の人々は政治に対して苛立ちを隠しきれない様子であった。「あのスキャンダルのもと、投票したかしていないか、忘れてしまった」というアネクドットまで出ていた。БАНの議長は「言葉の魂」について述べ、民族の独自性とグローバル化とのバランスについて説いていた。その後、アゼルバイジャンのスラヴ大学の教授へのブルー・リボン賞の授与式が行われ、最後に皆で Химн „Върви, народе възродени“を合唱して終了した。

筆者の発表（Исихастката концепция на Григорий Палама и български вариант）は翌日、5月25日の午後、中世ブルガリアの分科会においてであった。ボゴミール派に関する2本の発表とともに、筆者を含むヘシカズムに関する2本のほか、中世イタリアにおけるブルガリア人の痕跡について報告があった。質疑応答はボゴミール派に関してであったが、演壇に立って意見を述べた Драгомир

Лалчев 教授はヘシカズムに関する自著„Исторически обекти и лингвистична хронотопия на исихазма в източна тракия“ Велико Търново 2012 を紹介しながら、興味深い話をされていた。カザンルク出身の先祖はボゴミール派の人々であったこと。その子孫のご自身が今なぜ、ヘシカズムについて研究しているか、についてであった。つまり、男は戦争に行き女はボゴミール派に傾倒し、結果として家族の崩壊が起こった。そこで新たな価値システムの創出 създаването ценностна система が必要となった、という趣旨であった。また分科会終了後、その著作を発表者に一冊頂けることとなり、ここまでやって来て本当に良かったと思った。筆者にとっては何よりのご褒美であった。

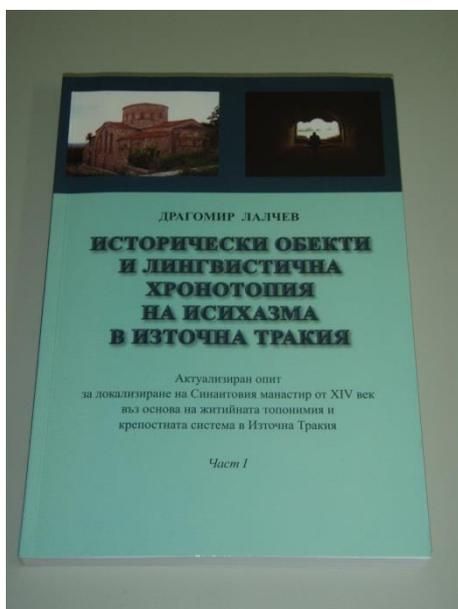
蛇足になるが、会議終了後、ギリシャのテサロニケを訪れることができた。キリルとメトディ兄弟が育った街を実際にみて、ギリシャとラテンとアラブの人々が渦を巻くように暮らしている様子を感じることができた。そして9世紀末ごろの当時について、エーゲ海を臨みながらしのんだ。また知人の紹介で、現在ビザンチン博物館に勤めるテッサロニキ大学神学部卒業の方で、アトス山を訪れたことのある人に出会い、話を伺うことができた。



開会式



筆者の発表



Драгомир Лалчев の著作